

AM Dannenberg Jr. 教授の思い出

加治木 章

先日、結核予防会複十字病院臨床研究アドバイザーの倉島篤行先生から、日本ではDannenberg教授の業績があまり紹介されていないが、もっと評価されるべきであるというメールを頂いた。確かに、素晴らしい業績のわりにあまり知られていないように思う。Dannenberg教授の研究室へ留学し、研究させていただいた者として、簡単にDannenberg教授の業績等を紹介したいと思う。

Dannenberg教授は、指導教官のLurie教授とともに、rabbitを用いた結核感染モデルを作成し、結核のpathophysiologyを研究された。結核感受性のrabbitではヒトの小児型肺結核（一次結核症）、抵抗性のrabbitでは成人型肺結核（二次結核症）に相当する病変ができることを利用して結核の感染・発病・進展のpathophysiologyを明らかにした。Dannenberg教授の研究成果は現在の結核病学（抗酸菌症学）のほぼすべてに反映されているといっても過言ではない。

Dannenberg教授は、最初の11年間はペンシルベニア大学のLurie教授の研究室で研究し、その後Johns Hopkins大学へ移られた。Johns Hopkinsの研究室へは熊本大学第一内科から代々留学が続き、その成果は日本における肉芽腫性疾患研究のメッカとして花開き、Dannenberg教授の学問が引き継がれた。昭和58年、熊本大学から出す人間がないとのことで、九州大学胸部疾患研究施設の石橋凡雄博士を通じて照会があり、原田進博士が留学することとなった。その後、私、樋口和行博士、久留米大学第一内科と引き継いでいった。ちなみに研究室では原田先生はSusu、私はAki、樋口先生はKazuというニックネームで呼ばれた。われわれが行った当時の米国では結核は過去の病気として関心が薄れていた時期であり、結核に関する研究費は獲得できず、米軍の研究費でマスタードガスによる皮膚炎症の研究を行った。この時期がDannenberg教授にとって一番苦しかった時代ではなかったかと思われる。Dannenberg教授はよくTrudeau研究所

のGB Mackaness博士の業績を大変評価し、ノーベル賞を受賞してもいいのにと言っていた。Mackaness博士は私の恩師の石橋凡雄先生が留学し師事された先生でありうれしく聞いた。

また、安藤正幸先生と原田進先生を大変評価し、彼らはgeniusであると常々言っていた。在籍中、大学院のImmunologyのコースを聴講させていただいた。石坂公成教授夫妻の講義も聴講した。私は不肖の弟子で、あまり業績を上げることはできず心苦しく思っている。しかし、Baltimoreの生活はしっかりと楽しんできた。

Dannenberg教授から学んだ最大のもは論文作成に対する真摯な姿勢である。推敲を繰り返す、内容はもちろん、副詞、形容詞、接続詞などに至るまで言葉を選び抜いていた。時には英語の苦手な私にまで意見を求めることがあった。当時の秘書のIlseは、一日に何度もタイプの打ち直しをさせられ悲鳴をあげていた。

Dannenberg教授は昼食の後は必ず昼寝をとっていた。この時間は、秘書や、研究補助の女性たちにとっても安楽な時間であり、電話番はわれわれに任された。直接相対してでも難しい英会話を電話で行うことは苦痛であった。しかし、Dannenberg教授の昼寝はアメリカの研究者の間では有名であり、「今昼寝中」と返事すると大概はやり過ごせていた。Dannenberg教授は、自分の専門外の実験は他の専門家に依頼して共同研究ができるネットワークを形成していた。競争と協調が米国の強みかと感じた。

Dannenberg教授の趣味はカメラ、写真であり、奥様のAileenとともに、撮った写真をカードにしていた。私も何枚か頂いたが、味のある写真であった。

英文の結核の教科書を見るとほとんどDannenberg教授が執筆したchapterがあり、国際的には結核研究の第一人者として認識されていると思う。

今、Dannenberg教授の著書 *Pathogenesis of Human*

Pulmonary Tuberculosis: Insights from the Rabbit Model (ASM Press, Washington, DC) を読み始めているが、改めて彼の研究の偉大さを実感している。呼吸器病学を専攻している人、特に呼吸器感染症、抗酸菌症に興味をもっている人は斜め読みでもよいので一読をお勧めする。

Dannenberg 教授の結核についての業績をもっと日本で

紹介するため、Dannenberg 研究室へ留学された先生方の追加の報告を期待する。

〔加治木章代議員は平成24年8月に御逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げますとともに、本号に御遺稿を掲載いたしました。編集委員会〕